



## Kinship story interwoven by donor conception.

### 配偶子提供が織りなす「親族の物語」

#### Interviewee

Dr. Petra Nordqvist

#### Q. 専門領域、これまでの研究について教えてください。

自分は社会学者で、質的な研究手法を用いている。主に donor conception(DC)に関わる家族へのインタビュー調査を行い、社会学的観点からこの分野を研究して現在 10-15 年になる。特に関心があるのは、DC が関係性にどのようなインパクトを与えているかということ。DC の影響は、個々のカップルやドナーだけの問題ではなく、家族のネットワークに流れ込み、既成の人間関係のあり方を覆し、秘密主義を誘発する可能性がある。

この分野での研究を始めたとき、最初に取りくんだのは家族を形成したレズビアンのカップルにインタビューすることだった。その後、レシピエントの両親とその家族へのインタビューのプロジェクトを完了した。最近のプロジェクトでは、卵子と精子のドナーに焦点を当て、ドナーであることが日常生活や家族、人間関係に与える影響について調査した。

#### Q. インタビューをされていますが、その中で印象に残った話、人物があれば教えてください。

個人差があるが、家族のあり方はいくつかのパターンがある。

拡大家族に焦点をあてたプロジェクトで聞いた話が印象に残っている。精子ド

ナーを利用した異性カップルにインタビューした際、妊娠を予定している母親が、誰がそのことをいどこに伝えるかを決めるための話し合いを持っていた(拡大家族のメンバーに伝えるのは彼女の仕事なのか？夫の仕事か？妹の仕事か？など)。このことから、リプロダクティブストーリーは、依頼親と子どもだけのものではなく、その兄弟姉妹、いとこ、叔父叔母、祖父母などにも及ぶものであることがわかる。

もうひとつ、配偶子ドナーの親族に行ったインタビューで聞いた話にも注目している。自分が発見したのは、ドナーのパートナーが、ドナー自身と同じくらいか、あるいはそれ以上に、提供とその結果に関心を寄せている場合もあるということだった。祖父母もまた、孫が生まれる可能性に関心をもち、希望を持っていることも多い。

ドナーの姉にインタビューしたことがある。姉は、ドナーになろうとする妹に対して、自分が意見を言うべきではないという葛藤を感じているようだった。彼女は、ドナーの子供を自分の子供のいとして見ているが、家族の成り立ち上、このことを妹と話し合うことはできないと思い、動揺していることがわかった。

ドナーは、ドナーになることをパートナーに話すことが多いが、親戚に対しては色々な対応をとる。一人の兄弟姉妹にだけ話すとか、兄弟姉妹には話すけど両親には話さないとか。いったん話しをしてしまったら、後戻りはできないので、その状況に対処していくしかない。

自分が知っている事例で、配偶子を提供する/使用するという選択が家族に亀裂を引き起こしたのはひとつだけ。しかし、依頼親と祖父母との間で、情報をどのように扱うかについての見解に違いが



ある場合、緊張が生じ、その状態がつづくのが一般的だと考えられる。

例えば、異性愛の両親は近い将来に子どもがドナーから生まれたことをオープンにすることを望むかもしれないが、祖父母は子どもに負担をかけるので黙っているべきだと考えるかもしれない。また、別の例では、両親が子どもに対して精子ドナーを使って妊娠したことを知らせていても、祖父母が子どもに対して「お父さんに似ているね」と言うようなこともある。

このような場合、この状況をどう切り抜けるかを考えるしかない。例えば、あるドナーの母親は、息子の精子から14人の子どもが生まれたが、「孫が欲しかったけど、もっと具体的に言えばよかったかな」と冗談半分に言っていた。それは彼女なりの適応だった。

### Q. 精子提供や卵子提供で親になった人が子供を持って初めて直面した、色々な問題にはどんなことがありましたか？どのように対処していましたか？

2005年にイギリスの法律が変わり、ドナーのアイデンティティの公開が義務づけられた。1990年代以降、親はドナーから生まれたことを子どもに伝えるよう奨励されてきたが、実際にどれだけの人が伝えているかはわからない。自分の研究では、ほとんどの人が子どもにオープンにしている。

1つの課題は、法律の建て付けに関する事。現在の法律では、ドナーから生まれた人だけに焦点が当てられている。特に、彼らがドナーに関する情報にアクセスする権利に着目している。しかし、幼い子どもにドナーから生まれたことを告げたとき、その情報を誰と共有するかについて、子どもは自覚的に決定できな

い。幼い子どもに配偶子提供について伝えるのは難しいことだ。少人数だけに伝えるのか、完全にオープンにするのか。その知識に対してどこまで子どもが責任を持つのか。これは、親を非常に悩ませる。出生の方法を聞いた子どもが、「卵」を探して冷蔵庫を開けたり閉めたりしたというような話を聞いたことがある。

家族は、周りの人たちが、子どもに対して気まずい質問をしないように、協力してほしいとできるだけ多くの人に伝えるなど、事態をうまく操縦しなければならない。しかし、同時に、その知識はドナーから生まれた人のものであるとも言われる。これは奇妙な緊張感を生み出している。一方では、その経験は依頼親に起こったことであり、他方では、その情報は子どものものであり、プライベートなことだから話すべきではないと言われるのだから。

英国の法律は非常に個人主義的で、親族関係を考慮していない(「親族の物語」=たくさんの人の間で相互につながった物語)。これは、家族がDCをどのように経験するのかをうまく扱うことができな。例えば、情報が自分の子どものもになった今、そのプロセスに何年も悩んだ末に、やっとドナーから子どもが生まれたことを友人に話すことに、親は罪悪感を感じるべきなのかといったことがある。

また、英国の法律は、情報共有に際して、兄弟姉妹がいることを考慮していない。あるレズビアンのカップルに話を聞いたことがある。彼女らは、ドナーの情報を共有するかしないかは子どもが決めることだと考え、他の家族に対して情報をガードしていた。しかし、同じドナーを介してきょうだい生まれたことで、誰がその情報を管理するのかという疑問



が生じた。例えば、きょうだいの一人がドナーについて知りたがっているのに、もう一人がそうでない場合、どうしたらいいのか？ 年上のきょうだいが18歳になったらその情報にアクセスしたいのに、きょうだいはまだ18歳になっていない場合はどうしたらいいのか？このような場合、誰がこのような話や知識を管理するのか？

**Q. 親にとって、日常生活の中で、「子供と遺伝的繋がりがないこと」を思い出させる機会は多いですか？ どのように対処していましたか？**

このテーマを直接研究したわけではないが、根底に不安があると見ている。両親は、遺伝的なつながりがないことを補うために、どのように生活を構築したらよいかを考えているようだ。

遺伝的な親でないことを補うといった話をする親がいた。親であることを疑われることに不安を感じ、親として「特別良い人」であろうとする人もいた。例えば、卵子提供を受けたある母親は、赤ちゃんが落ち着かないとき、その理由が遺伝上の母親でないからではないかと自問自答し、不安になっていた。

精子提供で妊娠出産したある異性愛カップルは、遺伝上の親でないことを埋め合わせるかのように、父親が子どもと多くの時間を過ごせるように生活設計をしていた。

家族間提供（例えば、家族の一人が他の家族に配偶子を提供すること）でも緊張が生じることがわかっている。例えば、特定のライフスタイルや特定の趣味を奨励するなどして、ドナーの家族と自分の家族の間に隔たりができるような子育てをすることが多い。

**Q. 遺伝子中心主義(DNA 神話)は、donor conception によって、ますます強まっていますか？**

これに対する明確な答えを持っていない。家庭生活のレベルでも、法的な観点からも、非常にパラドキシカルで複雑だ。

スウェーデン国籍で、イギリス人のパートナーとの間にドナーで妊娠出産した子どもがおり、そのうちの一人は彼女と遺伝的につながっているカップルがいた。彼女は、遺伝的なつながりのない子どもをスウェーデン国民として認めてもらうために、5年にわたる法廷闘争に耐えてきた。このように、家族がどのように行動するかは、法律で認められていることとは全く異なる場合があることが浮き彫りになっている。

DCの結果として現れる家族への親近感には、遺伝的なつながりの有無とはほとんど関係ないことがわかっている。遺伝的要素は重要であると認識されることもあるが、そうでないこともある。例えば、パートナーと、(治療費を賄うため)匿名のレシピエントに卵子を提供したレズビアン女性にインタビューしたことがある。卵子ドナー自身は、提供から生まれた子どもに特に興味を持っていなかったが、彼女のパートナーは非常に興味を示していた。このようにドナーのパートナーがドナー自身よりもドナーの子どもに興味を示している例を複数知っている。

ダブルドナー(精子と卵子の提供を受け、子どもとの遺伝的なつながりが全くない)で妊娠出産した女性にもインタビューした。彼女は息子を産んだ後に残った胚があったが、自分の遺伝子ではなく、息子と同じ遺伝子を持つ胚に大きな感情的つながりを感じた。これは、つながりの



感覚は必ずしも個人の遺伝的つながりと結びついているわけではないことを示している。

特に卵子ドナーは、子供の母親となるレシピエントに親近感を抱く傾向がある。ドナーから見て自分と遺伝的につながった子どもではなく、卵子を受け入れた女性にもっと関心を持つ場合があるということ。

これらの例では、強いつながりの感覚を生じているが、それは遺伝子のつながりに基づいていない。

**Q. 現代人にとって、遺伝的関係があるということは無視できないものでしょうか？ 遺伝的に関係がある人々を知り、彼らとつながらなければならないという観念がありますか？**

そのような証拠はインタビューから示されていない。とはいえそれは意味のある知識であり、自分が何者であるかを知ることであるという理解が、イギリス文化の一部であることは間違いない。

自分がインタビューしたドナーの多くは2005年以降に提供をしたことによるオープンドナーで、彼らに共通する信念は、あらゆるつながりを求めるのはドナーから生まれた人であるべきで、彼ら(ドナー)は受け身なアプローチをとるべきだということである。

英国の文化では、遺伝的な関係を調べるという考え方に対して大きな自由裁量がある。ある卵子ドナーは、提供精子で双子を産んだが、彼女の卵子を受け取った人もまた双子を産んでいたことがわかった。彼女の子どもの一人はドナーきょうだいに会うことにとっても興味を示していたが、もう一人はそうではなかった。そのことをどう理解するかは人それぞれで柔軟性がある。関係を求めないことを

選択しても、道徳的に非難されることはない。

**Q. 18歳までドナーのアイデンティティを知ることができないということは、子供や親にとって、どのようなインパクトをもたらしますか？**

10年前に行った親に関する研究では、このような問いを含んでいなかった。ドナーが誰で、どんな人なのかを知りたいから、知り合いにドナーを依頼した人たちがいた。この選択は、脅威とは受け取られず、当時は多くの人がクリニックに行けなかったという事実を反映している。知っている人にドナーを頼むというのは当時、それが唯一の選択肢だった。

特に精子提供を利用した異性カップルの間では、ドナーが脅威として立ちはだかった。ある男性にインタビューしたが、彼はドナーが現れて「自分の場所を奪う」ことを恐れていた。だから、少なくとも子どもが18歳になるまでドナーのアイデンティティがわからないという事実は、彼にとって安心材料であると同時に脅威でもあった。

2005年に法律が変わったとき、ドナーから生まれた人がこの時点で情報にアクセスできる可能性はかなり低かったが、今はもうそんなことはない。自分がインタビューした人の多くは、子どもがまだ幼かったので、まだそのようなプレッシャーはなかったが、これは変化しているかもしれない。

18歳でドナー情報を入手するのか、それともそれ以前に入手するのか、どちらが子どもの最善の利益になるのかという議論がなされてきた。それよりずっと前にDNA検査をする家族もいる。最初の集団が成人に達した後、クリニックがドナー情報の公開をどのように考えるか、興味深い。2023年が目前に迫っているが、リクエストに対応するための現実的なり



ソースは非常に少ない。DCの新しいフェーズは、かなり未知数な面を含んでいる。

**Q.出自を知る権利は、今後、イギリスにおいて、拡大する可能性がありますか(例.ドナーが子供を知る権利など)?**

このテーマについては、消費者向けDNA検査のブームによって、ドナー登録システムや18歳までのドナーの匿名性の確保が難しくなっていることも反映して、議論が進んでいる。完全に廃止すべきとの意見もあり、ひょっとするといずれ何らかの法改正が行われる可能性がある。

血縁に基づくモデルには多くの利点があると考えている。すなわち、より柔軟な枠組みで、より多くの人々に、より多くの方法で情報を入手することができるようにするという意味。例えば、人々が互いの同意によってつながる手段を定式化する(臓器提供者の家族とレシピエントの家族がつながることができるのと同じ方法など)。臓器提供者が亡くなった場合、登録されたいと思うドナーの家族(祖父母など)もいるだろう。ドナーから生まれた人に対しても同じような形でつながる手段を確保するということ。

DCを行う際、アイデンティティを公開しているドナーが賞賛される一方で、知り合いからのドネーションは「いかがわしい親類」のように見られている。にもかかわらず、この2つの間にはしばしば重なりがある。ドナーによっては、どちらか一方から始めて、もう一方に移行する人もいる。知り合いからのドナーに関する議論は、一変する可能性がある。

**Q. 遺伝的繋がりが無い親は、親としてのアイデンティティ、自分の立場をどのように維持しようとしていますか? 色々な場面で、喪失感に直面させられますか?**

この要素に対処するのが簡単な親とそうでない親がいるように思われる。若くして不妊症と診断され、ずっと前から不妊症と折り合いをつけている親もいた。くよくよせず、「これが私の家族なのだ」と言っていた。自分を責めることもなく、喪失感を表現することもなかった。それに対して、何年もトラウマになるような不妊治療に耐えてきた人たちにとっては、その話はかなりつらいものであるかもしれない。親であることを主張するのは誰なのか、例えば、誰かが突然やってきて親の地位が奪われるのではないか、といった疑いが彼らの心の中に生まれていた。

ドナー精子で妊娠出産したある女性は、自分の子どもが自分に似ていることを楽しんでいるが、夫の前ではそのことを言わなかった。夫を嫌な気持ちにさせたくなかったから。

レズビアンのカップルは、子どもを持つことを喪失ではなく、ポジティブなこととして考える傾向がある。

**Q. これから取り組みたい研究**

将来的には、ドナーではなく、ドナーから生まれた人の経験について研究を行いたいと考えている。例えば、ドナーから生まれたことを知らされたとき、それをどのように経験し、記憶しているか、その情報を自分の個人的な生活(例えば学校)の中で他の人と共有するか、しないのか。いつどのように共有するか、その結果、共有したことを後悔するか。秘密にするのか、誇りをもって共有するか、など。子どもが自分で情報を管理すること



が強調されているが、これは実際には非常に複雑なことだ。以前の研究で、2つの家族に提供したドナーがいた。一方の家族はDCのことを秘密にしていたが、もう一方は非常にオープンだった。これは管理しにくいことだった。

(2022年9月)

**Dr. Petra Nordqvist** [Link](#)

スウェーデンのルンド大学で社会学とジェンダー研究を学び、2005年から2009年にかけてヨーク大学女性学研究センターで女性学の修士号と博士号を取得。現在はマンチェスター大学の研究センターに勤務している。

家族関係や親族関係が体外受精・卵子・胚提供などの新しく開発された生殖医療技術によってどのような影響を受けるかについて関心を持ち、研究をしている。

出版物：

Nordqvist P. Un/familiar connections: on the relevance of a sociology of personal life for exploring egg and sperm donation. *Sociol Health Illn.* 2019 Mar;41(3):601-615.

Nordqvist P. "I've Redeemed Myself by Being a 1950s 'Housewife' ": Parent-Grandparent Relationships in the Context of Lesbian Childbirth. *J Fam Issues.* 2015 Mar;36(4):480-500.

Nordqvist P. Origins and originators: lesbian couples negotiating parental identities and sperm donor conception. *Cult Health Sex.* 2012;14(3):297-311.

Nordqvist P. and Smart C. Relative strangers: Family life, genes and donor conception. 2014; Palgrave Macmillan.

